（ 東中学校区）

タイトル **中学卒業までに読みたい本　20選**

No	書名	著者	出版社・出版年	おすすめ学年	おすすめコメント
1	ぐりとぐら	なかがわりえこ おおむらゆりこ	福音館書店	小学校低学年	♪ぼくらの　なまえは　ぐりとぐら このよで　いちばん　すきなのは おりょうり　すること　たべること ぐりぐら　ぐりぐら♪ のねずみのぐりとぐらの、小さなぼうけんをえがいた名作絵本。話の中で出てくる、カステラは、子どもたちにとって「絵本に出てきたおいしそうなもの」のランキング1位です。 ぜひ、シリーズで読んでください。
2	泣いた赤おに	浜田 廣介	偕成社　他		山の中でくらす、心やさしい赤おに。赤おには、村人たちとなかよくなりたいのですが、村人たちは赤おにをこわがって、なかなかうまくいきません。ともだち思いの青おには、赤おにのためにあるおしばいを考えます。 友情・思いやり・・・人として大切な気持ちを考えさせられる話です。
3	おばけのバーバパパ	アネット・チゾン タラス・テイラー やましたはるお（訳）	偕成社		体をどんなものにでも変えられる、おばけのバーバパパ。大切な家族のため、人間たちのために、いろいろなものに変身して、いろいろな事件を解決します。 50年も前にかかれた絵本ですが、絵がポップでおしゃれ。自然破壊・教育問題・多様性など、SDGsの時代を予想したようなお話の内容に、驚かされます。ぜひシリーズで読んでください。
4	いもとようこ 昔話シリーズ	いもとようこ	金の星社		子どもたちに伝えていきたい「むかしばなし」。いもとようこさんのやわらかいタッチのさし絵と、わかりやすい文章の、「むかしばなしシリーズ」です。
5	ともだちや	内田 麟太郎	偕成社		キツネとオオカミの友情ものがたりシリーズ。けんかをしたり、やきもちをやいたり、いじわるしたり、でもおたがい大好きで・・・。小学生の友だち関係とそっくりな話がたくさんつまっています。 様々な経験から、本当の友情を育てていく、小学生にとっては等身大の自分を感じられる作品です。
6	100万回生きたねこ	佐野　洋子	講談社	小学校中学年	いろいろな人（ねこ）生をくり返し生きるねこ。その数100万回！いろいろな飼い主にも会います。船乗り・どろぼう・小さな女の子・・・。ねこが死ぬと、飼い主は悲しみますが、ねこはちっとも悲しくありません。しかし、ある出会いがねこを変えます。 大人が読んでも考えさせられる絵本です。
7	としょかんライオン	ミシェル・ヌードセン ケビン・ホークス 福本　友美子（訳）	岩波書店		ある日、図書館にライオンがやってきて、みんなこのライオンが大好きになります。ところが、事件が起こって・・・。きまりより大切なことがあると語りかけてくれる本です。
8	エルマーのぼうけん	ルース・スタイルス・ガネット ルース・クリスマン・ガネット 渡辺　茂男（訳）	福音館書店		飛行機で空を飛ぶことを夢見る少年エルマーは、ある日、年老いた猫から動物島にいるかわいそうな竜の話を聞き、助けに行きます。ドキドキしながら一気に読める作品です。
9	窓ぎわのトットちゃん	黒柳　徹子	講談社		現在放送中の「徹子の部屋」の司会者である黒柳徹子さんが、小学生の時のお話です。 ちょっと変わった学校に、みんなも通いたくなることまちがいなし！
10	バスが来ましたよ	由美村　嬉々	アリス館		この本は、実話をもとに書かれたお話です。 みんなが、実際こんな場面に遭遇したとき、どう行動するか考えながら読み進めてみてください。 心温まるお話に、読み終わったときみんなの心にも、勇気の花が咲いていることでしょう。
11	おおきな木	シェル・シルバスタイン ほんだ　きんいちろう（訳）	篠崎書林	小学校高学年	ある木が、そこに来た男の子の要望に応え、自分の体の一部（枝など）を差し出し続けるお話。人に何かを与え、それを喜んでもらうことは、私たちの喜びの一つですが、それは必ずしも自己犠牲がないといけないものなのでしょうか？「幸せとは何か？」を簡潔な文章で問いかけてくる深い作品です。
12	「あらしのよるに」 シリーズ	きむら　ゆういち	講談社		ある嵐の夜に、雨風をさけるため、オオカミとヤギこわれかけた山小屋に逃げ込みます。身を寄せるうちに、「食べるもの」「食べられるもの」というお互い正体を知らないまま、友情を深めていきます。子どもだけでなく大人の心も捉えるベストセラー絵本シリーズです。映画やアニメにもなっている、大人気作
13	星の王子さま	サン・テグジュペリ	岩波書店他		「お願い・・・、ヒツジの絵を描いて。」「なんだって？」「ヒツジの絵を描いてよ。」雷が落ちたみたいにおどろいたよ。立ちあがって目をこすり、声のしたほうを見つめた。するとそこには、とてもふうがわりな、小さな貴公子がいて、悲しそうにこちらを見ていた。 こんなふうに、目の前にふいに現れた王子さまこそ、小さな星の王子さまなのです。人を好きになるということのすばらしさと、責任を伝える物語です。
14	だれも知らない小さな国	佐藤　さとる	講談社		「日本で最初のファンタジー」と言われているシリーズ。小指ほどの大きさしかない「コロボックル」と呼ばれる小さな人たちと、小学生の男の子の物語。 「キミハ　ダアレ？ドコカラ　キタノ？」コロボックルはカタカナでお話しします。これがとてもかわいいです。 主人公の成長と重なって、途中からはとても素敵なラブストーリーとしても楽しめます。 大人が読んでも、子どものころの瑞々しい感性を思い出させてくれて、
15	きよしこ	重松　清	新潮社		吃音をコンプレックスに感じる少年の、成長物語。短編集にもなっていて、１章が短いので、とても読みやすい作品です。主人公の「きよし」と一緒に悩んだり、ドキドキしたり、ときめいたりできる作品。コンプレックスに悩みながら、それでも立派にたくましく成長していく「きよし」はカッコイイ！！
16	かがみの孤城	辻村深月	ポプラ社	中学生	2018年本屋大賞にノミネートされた本です。狼面の"オオカミさま"によって、それぞれの部屋の鏡から城に集められた子ども達。みんなと同じになれない・・・。失敗した子、普通になれない・・・その事を苦しく思っていた子ども達の話。この本を読むことで、教室で闘っている子と闘っている子を見守る人の心に灯がともったらうれしいです。
17	アンネの日記	アンネ・フランク	文春文庫		第2次世界大戦下、ナチスドイツによるユダヤ人狩りから逃れ、家族で「隠れ家」に潜んで生活したアンネの2年間を記録した実話。咳をすることもままならない隠れ家の生活の中でも、勉強をして日記を綴りながら「戦争が終わったらこの日記を出版して、世界に私の考えを知らしめたい」と明るい希望をなくさなかったアンネ。その瑞々しい感性と才能に驚かされます。2009年ユネスコ「世界の記憶遺産」登録。
18	雨の日も、晴れ男	水野敬也	文春文庫		小さな神様によって、不幸のどん底に立たされたアレックス。しかし、彼は不幸をはねのける発想の持ち主だった。「ピンチはチャンス」の本当の意味を教えてくれます。前を向けないあなたに、現実を受け入れながら少しずつ前を向く方法を教えてくれる物語です。
19	坊っちゃん	夏目漱石	新潮文庫		明治・大正時代の文豪の作品の中でも比較的読みやすい作品です。坊っちゃんの行動が破天荒で、笑える場面がたくさんあります。一方で、正直に生きる姿勢からは学びも得られると思います。
20	夜のピクニック	恩田陸	新潮文庫		夜を徹して80キロを歩き通す高校最大のイベント「歩行祭」を行う中で繰りなされる学生たちの交流を描いた物語です。読み終わった後、どこかスッキリした気持ちになれる不思議なお話です。

＜リストの意図＞
東中校区読書活動実行委員会では、読み聞かせボランティア・保護者のみなさんに「中学卒業までに読みたい本」のアンケートを行いました。アンケート結果に、巡回司書さん・読書活動実行委員の意見を加え、小学校低・中・高学年、中学生向けの本をそれぞれ5冊くらいずつリストアップしました。